

ZHANG
張

RU XIU
汝 秀

学位の種類 博士（教育学）
学位記番号 教博 第 66 号
学位授与年月日 平成 16 年 10 月 20 日
学位授与の要件 学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科・専攻 東北大学大学院教育学研究科（博士課程後期 3 年の課程）
教育学専攻
学位論文題目 現代台湾における人間性重視のカリキュラム改革に関する研究
— 日米のカリキュラム改革からの影響を中心に —
論文審査委員 (主査)
教授 水原 克敏 教授 小泉 祥一
助教授 谷口 和也

論文内容の要旨

本論文は米国および日本で行われている Humanistic Curriculum 理論と実践をふまえ、1990 年以降、現代台湾で行われている人間性重視のカリキュラム改革に関する分析と考察を研究課題とした。

本論文の構成は二部から成り、第一部は、「日米における人間性重視のカリキュラム理論」、第二部は「現代台湾のカリキュラム改革における人間性教育の理念」である。

まず、第一部では、影響を与えた米国の Humanistic Curriculum 論が理論的にいかなる特質を有し、また日本では、学習指導要領を中心にどのような展開がなされたのかを明らかにし、第二部に至って、受容した台湾では、どのような「課程標準」（学習指導要領に相当するもの）が策定されたのか、学校現場では具体的にどのようにカリキュラムの編成と展開がなされたのか、について明らかにした。そして結論では、第一部と第二部での分析をふまえ、現代台湾で展開されている人間性重視のカリキュラム改革の意義と課題について考察した。

次いで、各章節の要旨であるが、序論では、現代台湾のカリキュラム改革を研究する目的と、先行研究の総括、そして本論文の研究課題と構成をまとめた。

第一部第一章「アメリカにおける Humanistic Curriculum の人間性教育理論」では Humanistic

Curriculum 論の登場背景、理論展開、さらにその道德教育理論などへの分析から Humanistic Curriculum における人間性教育理論の類型を見出し、第二章では、「Humanistic Curriculum 理論とその展開」を分析した。

第一部第三章「日本における人間性重視の教育課程改革」では、日本における人間性教育理念の特徴を見出すため、まず、中央教育審議会と教育課程審議会の改革理念・施策について考察した。次に、学習指導要領への検討を通し、1980年代から行われた人間性教育のカリキュラム改革の内容を分析した。

そして本章の最後に第一部を総括して、米国と日本における Humanistic Curriculum の理論と実践を考察し、これによって、次の第二部「現代台湾のカリキュラム改革における人間性教育の理念」で、諸課題を検討するための理論的準備をした。

第二部第一章「民主化後の社会状況および人間性重視の教育理論の受容過程」では、まず、台湾が従来の閉鎖的・統制的な教育体制を開放的・民主的な教育体制に転換する経緯を論じた。次に、その民主化後、初めて人間性重視の教育理念を取り入れようとする新「課程標準」および道德教育の内容について検討を加えた。つまり、本章では人間性教育の転換期に改訂された台湾の「課程標準」の内容について分析したのである。民主化されて間もない当時の人間性重視のカリキュラムと後の九年一貫性教育課程とは、明らかに大きな異同が見られる。本章は台湾での人間性重視の教育方針への変化を論究するための伏線として位置づく。

第二部第二・三章は、1980年代から1990年代後半の教育改革動向を分析することが目的で、新「課程標準」における人間性教育内容への検討と、教育改革審議会の報告書から1990年代後半のカリキュラム改革の動向を考察した。また、改革をより明確にするため、その一環としての教育課程審議会での組織改革も取り上げ、教育課程行政の性格転換についても言及した。つまり、本章は九年一貫性教育が、いかに大きな改革であるかを裏付けるもので、そのために1990年代後半のカリキュラム改革と教育課程審議会という、二つの動向を分析した。

第二部第四章「1990年代後半の九年一貫性教育課程改革」においては、Humanistic Curriculum 論における人間性教育の観点から、九年一貫性教育課程の内容構成とその課題を検討した。「課程綱要」の公布および九年一貫性教育課程の実施は、台湾のカリキュラム史上の画期的な改革である。それは第二章第三章で裏付けられたが、本章では九年一貫性教育課程の理論面から、その人間性教育の内容を論じた。

第二部第五章「九年一貫性教育課程の実践例」では、具体的に、九年一貫性教育課程の実践例の検討を試みた。台湾のカリキュラム改革は、政治の民主化に並行して、教育改革も急テンポで進められてきた。その結果、理論性より現実性のある教育実践が重視され、解決しなければならない多くの問題を内包することになったのである。

結論では、現代台湾のカリキュラム改革が、米国および日本で展開された Humanistic Curriculum の理論的・実践的影響を受けたものであること、かつ、現代台湾の現実的な変化と要請に対応するため、独自の性質を持っていること、そして、その展開に潜む問題と限界も存在することを論じた。以下、その結論の要旨である。

現代台湾のカリキュラム改革は、従来の知識中心、画一的、エリート志向、中央集権などといった時代への批判・反省を反映し、人権と多元的文化を重視し、児童生徒の創造性・独創性を育てようとするものである。特に、九年一貫性教育課程では従来の道德教育の教科科目を設置せず、それを各学習領域の中に統合して行うことは、道徳的な雰囲気の中で児童生徒の道徳性を効果的に育てようとする考えがうかがわれる。

しかし、カリキュラム改革には、次のような限界がある。

第一に、各学習領域を裏付ける理論性・学問性が乏しい。反知識中心、反エリート志向という前提の下で、児童生徒の主体性を重視し、教育内容の統合化を強調するため、本来の各教科・知識自体の持つ理論・体系を看過しやすく、結局、各学習領域は理論性のない実践となり、安易な教育内容に陥る恐れがある。

第二に、教育課程行政の地方分権化によって教育水準の維持向上が難しい。九年一貫性教育課程におけるカリキュラムの開発は、各学校に委ねられるため、一定した教育水準の確保が難しい。特に各学習領域における教育内容はまだ明確にされていないため、教育課程の編成や学習内容の構成などが一層困難となり、また教育水準の差異を生じることが避けられない。

第三に、道徳性がますます低下している状況下で、その道徳性をいかに取り戻すべきか、また道德教育の現状に対し、いかなる対応策を取って、児童生徒の道徳性を育成すべきか、という根本的な課題も課せられている。七大学習領域の主な学習内容および六大議題の内容・指標において、道德教育に直接関連のあるところが見当たらない。また、道德教育は七大学習領域の中で一体どの学習領域に属しているのかも断定できないため、道德教育への軽視という懸念の声がある。理念的には、総合的に道德教育を行うということではあるが。

第四に、改革案を成功させるため、その教育条件の整備・確立が極めて必要である。なかでも教育評価、カリキュラム開発などの研究機関の設置は当面の緊急課題である。こうした Humanistic Curriculum の教育理念を実現しようとする台湾の人間性重視のカリキュラムは、確かに多くの課題を抱えているが、その改革内容は多元的なカリキュラムの開発を目指しているため、今後いかなる展開がなされるかについては、注目に値すると思われる。

以上が本論文の結論である。

論文審査の結果の要旨

論文審査の結果、以下の点が指摘できる。

1. 米国における人間性重視のカリキュラム理論は一義的に論じられないので、複数の理論提唱者をあげて、いくつかのタイプに分けて分析したことは評価できる。それにしても、何をもって「人間性重視のカリキュラム」と言えるのか、その原理・原則については、もうすこし厳密に明らかにすることが必要であった。この分析が曖昧な分だけ、後の日本および台湾の実態分析に弱さをもたらしているように思われる。
2. 日本でのカリキュラム展開では、「人間性重視のカリキュラム」理論の類型分析から見て、どのような側面に特徴があると言えるのか、本論文の中心課題が日本研究ではないにしても、台湾への影響関係でいうと日本のどのような点が注目されるのであろうか。審議会および学習指導要領などの分析を通して一定程度明らかにしたことは評価できるが、上記理論の類型分析をふまえて、より厳密に吟味するならば、いっそう鋭角的な指摘ができたはずである。
3. 台湾では、台湾特有の政治・経済・社会の状況があり、それらが様々に影響して、ある種の変容をしながら「人間性重視のカリキュラム」が採用されたと見られる。その追究において、貴重な資料に基づく実態分析をしたことは評価に値するが、カリキュラムに関する理論的検証に一層の吟味がほしい。例えば、(1) 教育政策など「課題標準」策定段階での特徴は何か、(2) カリキュラムの実施段階での特徴は何か、その実態について詳細な追究をしてはいるが、改めて、類型分析されたカリキュラムの理論的原則に照らして検証するならば、そもそも「人間性重視のカリキュラム」の原理・原則とは何であったのかという問に立ち返ることになり、単に台湾の課題を明らかにするだけでなく、「人間性重視のカリキュラム」の原理・原則自体も相対化する視点を獲得することができたのではないだろうか。

審査の結果、本論文については以上のような課題を指摘できるが、全体としてみれば、三ヶ国にわたる困難な研究作業であるにもかかわらず、米国での人間性重視のカリキュラムに関する理論的分析に始まり、日本への影響と展開、そして台湾でのカリキュラム改革と教育実践へという連鎖が、ダイナミックな影響関係で捉えられており、本研究課題の追究はほぼ成功していると判断できる。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として合格と認める。